

# 國學院大學学術情報リポジトリ

## 『枕草子』と〈伊周の復権〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 津島, 知明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000789">https://doi.org/10.57529/00000789</a>

# 『枕草子』と〈伊周の復権〉

津島 知明

キーワード

雑纂本枕草子 章段配列 人物呼称 藤原伊周 復権譚

はじめに

現存雑纂本の配列を重視して、枕草子の「日記回想段」を読み直す試みの一端である。これまで六篇の論考で考察を続けてきた。<sup>(1)</sup> 本稿では、九六段を中心として、藤原伊周を描く章段群を取り上げる。定子の清少納言への理解の程を描いたとされる九六段に、伊周が「内大臣」として登場することに注目し、後に復権を果たしてゆく伊周当人の姿とも関わらせながら、枕草子における〈伊周像〉を検証していきたい。

## 一、「職の御曹司」ふたたび

八四段で〈定子の入内〉を描き、職の御曹司に別れを告げた枕草子。だが再び「職におはしますころ」という事件時を冒頭に掲げるのが、九六段だった。職を舞台に、いまだ語り残した〈物語〉があったのだろうか。

五月の御精進のほど職におはしますころ、塗籠の前の二間なる所をことにしつらひたれば、例様ならぬもをかし。

まずは時（五月）と場所（職）が提示され、条件を満たす長徳四年が事件時と認定されてくる。斎月の五月、塗込の前の二間をしつらえて、職は精進潔斎に入っていた。「例様ならぬもをかし」と讃えられる「御精進」の風情だが、この話題が以下に引き継がれるわけではないようだ。

一日より雨がちに曇り過ぐす。「つれづれなるを、郭公の声たづねに行かばや」と言ふを、「われもわれも」と出で立つ。賀茂の奥に、「なにさき」とかや、七夕の渡る橋にはあらでにくき名ぞ聞えし、「そのわたりになむ、郭公鳴く」と人の言へば、「それはひぐらしなり」と言ふ人もあり。「そこへ」とて五日のあしたに、宮司に車の案内言ひて北の陣より「五月雨はとがめなきものぞ」とてさしよせて、四人ばかり乗りて行く。

一日から雨がちだったという、天候へ話に移る。そして「五日のあした」に「四人ばかり」の女房が「賀茂の奥」に郭公を聞きに出かける所から、ストーリーが動き出す。ただ「七夕の渡る橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし」と意味ありげに語られる目的地「なにさき」の話題も、それ以上は掘り下げられない。一条大路に出て「馬場といふ所」をやり過ごした後、彼女たちが辿り着いたのは、高階明順の家だった。

かくいふ所は、明順あきのぶの朝臣の家なりける。「そこもいざ見む」と言ひて、車寄せて下りぬ。

ついでに立ち寄ったように見えるが、ここが散策の終着点となる。郭公は「かしがましと思ふばかり」鳴いていたので、目的は果たされたのだろう。以下、稲扱きの実演など明順の接待攻勢に、「時鳥の歌詠まむとしつる、まぎれぬ」とある。初めて〈歌〉への言及がなされる箇所。当日の歌は「公務出張の報告書」とも言えるので、出発時から潜在していたテーマではあるう。いわばそれが明確に示されたわけだ。歌はいつ詠まれるのか。どのような歌が詠まれる／詠まれないのか。〈詠歌の行方〉がストーリーを牽引してゆく。

その後も「手づから摘みつる」「下蕨」まで繰り出して明順の歓待が続くなか「雨降りぬ」という報告がもたらされた。よって歌は詠まれぬまま、一行はそこを立つ羽目に。「さはれ道にても」と、帰り道での詠歌が予告されるも、「いみじう咲きたる」卯の花による牛車の飾りつけに興じてしまう（後文に「雨まことに降りぬ」とあるので、この時点では小降りだったのだろう。以下も雨脚の描写は〈詠歌の行方〉に関わってゆく）。帰り道、もはや彼女たちの関心は「この車を誰に見てもらえるか」に移っていた。大内裏に近付くも、いまだ「あやしき法師」や「下衆の言ふかひなき」際にしか出会わない。「いとかくてやまむは」「この車のありさまぞ、人に語らせてこそやまめ」との思い押さえ難く、「一条殿」に立ち寄り「侍従殿（公信）」を呼び出す仕儀となった。

一条殿のほどにとどめて「侍従殿やおはします。時鳥ときどりの声聞きて今なむ帰る」と言はせたる、使つかひ「ただ今まゐる、しばしあが君」となむのたまへる。侍さむらいにまひろげておはしつる、いそぎ立ちて指貫奉りつ」と言ふ。

往路の「明順の家」に対し、復路ではこの「一条殿」が立ち寄り場所として登場してくる。だが呼び出しておきながら、彼が「指貫お召し中」だと知った一行は、「待つべきにもあらず」と牛車を進めてしまう。帯を結びながら、あわてて追いかけてくる公信。土御門でようやく追いつき、車の様をひとしきり「笑ひ」興じた後、「歌はいかが、それ聞かむ」と訊いてきた。〈詠歌の行方〉を前景に呼び戻す台詞である。「今、御前に御覽せさせて後こそ」と、その場は取り繕ったものの、邸に戻った公信からは後に歌を贈られることに。おかげで、

彼への返歌という新たな仕事が発生してしまう。公信は〈詠歌の行方〉にも関わる人物だったわけだ。

さて、まゐりたればありさまなど問はせたまふ。恨みつる人々 怨<sup>みん</sup>じ心憂<sup>う</sup>がりながら、藤侍<sup>とうじゆう</sup>従の一条の大路走りつる語るにぞ、みな笑ひぬる。「さて、いづら歌は」と問はせたまへば「かうかう」と啓すれば……。

職に帰り、公信の様子を語ると、置いてきぼりをくった女房たちも思わず笑い出す。だが定子だけは〈詠歌の行方〉を忘れない。「さて、いづら歌は」と当然の要求をする。「かうかう」と白状しても、「ここにも詠め。いとふかひなし」とあくまで歌を所望する中宮。郭公の歌に、公信への返歌。ふたつが重くのしかかるが、以下「かきくらし雨降りて」雷まで鳴り出す荒れ模様は、一首も詠めぬまま一日は終わってしまうのだ。

## 二、「内大臣」伊周の登場

「二日ばかりありて」下蔵を話題にした宰相の君の言葉を受け、定子が「したわらびこそ恋しかりけれ」と書いて「本」を要求。それに〈私〉が「郭公たづねて聞きし声よりも」と応じたことで、ようやく〈詠歌の行方〉はひとつの決着を見る。しかしそれは〈私〉が「歌詠みはべらじ」という日頃の思いを吐露する呼び水となった。

「今もなどかその行きたりし限りの人どもにて言はざらむ。されど『させじ』と思ふにこそ」とものしげなる御けしきなるも、いとをかし。

という、二日前の定子の推察（詠む気がないのではないか）は、〈私〉に関しては半ば当たっていたわけで、それゆえの「いとをかし」だったことが明らかになる。そして「亡き人（父元輔）のためにもいとほしうはべる」という〈私〉の訴えを「さらばただ心にまかす。われ

は『詠め』とも言はじ」と中宮も了承してくれたことが報告される。それを受けて「いと心やすくなりはべりぬ」今は歌の事思ひかけじ」という安堵が記された直後、唐突に場面は転換する。

庚申かうしんさせたまふとて、内うちの大おほい殿 いみじう心まうけさせたまへり。

庚申待の夜「内大臣」伊周の登場。郭公探訪から間もない出来事のように描かれているが「五月」以降、この年の庚申は七月四日だった。よって『集成』など同日の出来事と解すが、下玉利百合子は権記七月五日条に中宮病悩の記事があることなどから、次の庚申「九月四日」説を提唱した。<sup>(5)</sup>『解環』はそれを受け、「今は歌の事思ひかけじ、など言ひてあるころ」なる筆致が百十六日も後ではありえないとして、再度「七月四日」説を主張している。<sup>(6)</sup>主題に沿って出来事時を自在に結びつけるのは、それじたい日記回想段に珍しいことではない（四七段など）。七月でも九月でも、「など言ひてあるころ」という装いで後日談を直結させる構成に変わりはない。ただ三巻本に限っては、次段に同じ「職」での「八月十余日」の風情を描くので、九六段末を「七月」とすれば、五〇七〇八月という時の流れが現出されよう。だがそれは、「前段で九月まで話が飛んでしまったので、描き残した八月の逸話を付け足した」という説明も可能とする。三巻本の配列は「庚申」事件時の決め手にはなるまい。となれば優先すべきは権記との整合性であり、ここは「九月四日」の方が妥当なのではないか。それだけの日数（九月ならもちろん五月だとしても）をおいて特権を行使した「清少納言の執念深さ」に驚嘆する向きもあるが、<sup>(7)</sup>ここは（下玉利も指摘するように）<sup>(8)</sup>伊周の前で行使された所に記す意味があるのであって、以前にも行使されていたかもしれないし、そもそも「物のをり」がなければ使えない特権である。

ところで、この「伊周の登場」は二・七七八段に次いで三度目となる。しかも、これまで「大納言殿」と呼ばれてきた伊周が、初めて「うちのおほい殿」として登場する。振り返れば、先の七八段は（前稿で触れたように）<sup>(9)</sup>正暦五年末と思しき逸話だった。よって同年八月に「内大臣」となっている伊周は、むしろそこでこそ「うちのおほい殿」と呼ばれるべきだった。さらに九六段以降、再びの登場となる。一〇一段は、長徳元年二月という事件時が明らかだが、やはり「内大臣」でなく「大納言（殿）」が選ばれている。以下、一二五・一七八・二六二・二九五段と、呼称はすべて「大納言殿」（大納言・権大納言）。枕草子は「左遷以前の伊周」を「大納言」で統一している

のだ。つまり本編ではこのみに見える「内大臣」(もう一例の跋文については後述)は、長徳四年当時無位無官であり、諸記録がほとんど動向を伝えない「召還後の伊周」のために、周到に用意(温存)された呼称と言えらる(10)。枕草子以外で、わずかに召還後の動靜を伝えるのは栄花物語である。(11)

帥殿はそのままに一千日の御齋にて、法師恥づかしき御おこなひにて過ごさせたまふ。(卷六)

帥殿そのままの御精進なれば、法師に劣らぬ御有様、おこなひなるに、ただ今はこのことをのみ申させたまふ。(卷七)

そもそも栄花物語は帰京のいきさつが史実と異なり、「一千日の御齋」の実態も不明である。ただこの時期の伊周(帥殿)が、法師顔負けに(精進に励む者)と認定されていたことがわかる。そこで思い起こされるのは、九六段が「御精進」から幕を開けていた点である。職の御曹司は、先の八四段では「不断の御読経」の舞台として登場し、それが「常陸のすけ」を呼び寄せる磁場とされていた。九六段の「御精進」にも(同じく冒頭に提示されるからには)プロローグとしての機能を見出すべきではないか。先述のように伊周が登場する「庚申待」が九月四日だったとすれば、そこそは次の「齋月」にあたる。つまり伊周が職を訪ねる名目として「九月の御精進」が暗示されているのだ。冒頭の「五月の御精進のほど」は、彼をテキストに招き入れる(隠し扉)だったことになる。

いずれにせよ、本段は「庚申待」の場面に至り、それまでの(詠歌の行方の物語)を、あたかも伊周を呼び込むための長い序章へと変換させてゆく。本段後半部の展開には「余波があまりに大き過ぎて、統一を欠く」、(叙述が『点』から『線』へ流れて)筆の冴えが見られない(13)等、否定的な見解も多い。だが後半部はおそらく(詠歌の行方)から単に筆が流れた結果ではあるまい。「内大臣」なる呼称と合わせて、伊周の(復権)は、初めから密かに仕組まれていたと見るべきだろう。

### 三、復権譚の地下水脈

伊周の復権譚。本段をこうした視点から読み直したとき、新たな意味を引き受けるのが、前半に表出された二つの現場である。「明順邸」

と「一条殿」。まずは往路で立ち寄ったとされる「明順の朝臣の家」。ここで注目すべきは「朝臣」を付したその呼称だろう。高階明順はここが初登場だが、再登場（三巻本のみ）となる二六二段でも「明順の朝臣」と呼ばれている。枕草子において、地の文で姓（かばね）を付されるのは、ほかに高階業遠の一例のみ（一本二七段。会話文では行成一例）。この「朝臣」こそは、中宮定子の外祖父として地位向上をはかる成忠（明順の父）が、従二位に叙された後に賜ったもの（『尊卑分脈』によれば正暦二年九月）。「藤原朝臣」に対抗するかのとき、当時の高階氏の権勢を象徴していた。

さらに明順自身は、周知のように長徳の変でも（兄弟の信順・道順たちと異なり）連座を免れた人物。政変後、二条宮を火災で失った定子が身を寄せていたのも、彼の小二条邸だった。本段の「家」は別邸と思われるが、その「障子」「屏風」「簾」に体现された趣味志向が好意的に描かれていた。翌長保元年、敦康誕生の翌月には中宮亮だったことが小右記に見え（十二月十六日）、長保三年十一月には、敦康着袴儀に際して（伊周に先立って）昇殿を許されている。ちなみに、いまひとりの「朝臣」業遠は明順の従兄弟にあたる。「業遠者、大殿無双者也」（小右記）と伝えられるように、道長・頼通にたびたび献物し、良好な関係を築いていた。枕草子では一本最後の章段で、従者への躰を賞賛されている。つまり枕草子で「朝臣」と呼ばれる二人は、寛弘年間まで地位を保った高階氏の代表であり、道長の覚えもめでたき人物だった。敦康の成長に伴い、現実には伊周が復権する時、頼みともなるべく「高階朝臣」の筆頭に、書き手はここで焦点を当てているのだ。

復路に登場する「一条殿」は、いわずと知れた花山院事件の舞台である。まさに邸宅自体が、負の記憶を担う特別な現場。伊周を登場させる直前に、「一条の院」（二二九段）に生まれ変わる以前の「一条殿」そのものを、書き手はあえて紙上に載せたことになる。栄花物語（巻四）によれば、為光薨去後の一条殿は「寝殿の上」（三の君）が相続するも荒廃が進んでいたという。後に佐伯公行が買い取って詮子に献上されるが、長徳四年当時は、東望歩の指摘するように、伝領者たる三の君がまだ在住していたと思われる。花山院事件の現場、その原因とも目された（伊周が通った）三の君の領する邸の扉が、ここであえて開かれていたのだ。だが先述のように、本段の一条殿は、そこで「まひろげておはしつる」公信によって滑稽譚の発火点となっていた。伊周に課せられた罪科、一条殿の忌まわしい記憶は、（卯の花垣根の車）や（疾走する公信）という新奇な狂態の連続注入により、「笑い」で塗り重ねられたのだ。「侍従殿」公信は（記憶の上書き）をも担う人物だったことになる。

「御精進」から「明順の朝臣」「一条殿」へ。〈伊周の復権譚〉として本段を読み直すと、以上のような地下水脈が見えてくる。そこに深く身を潜めていた伊周は、「庚申侍」の夜を舞台に、いよいよ満を持して浮上してきたわけだ。それは、

夜うちふくるほどに、題出だして女房にも歌詠よませたまふ。

とあるように、歌会の主催者としての登場だった。「庚申詩会」に準じた趣向といえようか。後文に見える「題取れ」という言葉から、これは歌題を複数で分け取って詠歌する「探題」の形式で、漢詩の探韻に由来するという指摘もある。<sup>(17)</sup>「才の人」伊周は、二一段の定子の役割を引き受けるかのように、ここでは「宮廷文化」をもって女房を束ねようとする。ならばかつての「清涼殿の春」を再現するように、〈私〉もまた見事にその趣向に応じて見せるのだろうか。

#### 四、「内大臣」の役割

しかし、以下に描かれてゆくのは、伊周の「心まうけ」を拒み通す〈私〉だった。

みなけしきばみゆるがし出だすも、宮の御前近くさぶらひて物啓けいしなどことごとをのみ言ふを、大臣御覽おとどじて「など歌は詠よまでむげに離はなれるたる。題取れ」とてたまふを、「さる事うけたまはりて歌詠よみはべるまじうなりてはべれば、思ひかけはべらず」と申す。

拒否の理由は、中宮から承った「さる事」という。ただここでは、先のように「亡き人」(元輔)への複雑な胸中まで語ったわけではないだろう。それゆえ伊周は「なかさはゆるさせたまふ」と中宮の処置に納得せず、「今宵は詠め」と迫ってくる。今夜のような歌会こそ、父の手前ご免蒙りたい〈私〉なのだから、「け清う聞きも入れてさぶらふ」しかない。伊周の方も結局は諦めたのか、歌会は〈私〉を除外して進行していったようだ。二一段とは正反対の展開である。

その後「みな人々詠み出だしてよしあしなど定めらるるほど」、即ち歌会が批評の段階に入るころ、定子が歌を「投げ」てよこした。

元輔もとすけがのちといはるる君しもやこよひの歌にはづれてはをる

ひとり蚊帳の外にある〈私〉を見て、伊周にはこの場で事情を知らせておくべきだと判断したのだろう。主人としての心遣いと思われる。瞬時にそれを理解したゆえ、〈私〉は「をかしき事ぞたぐひなきや」と感激した。「いみじう笑ふ」その声につられて「何事ぞ、何事ぞ」と伊周も注目するなか、次の歌が披露される。

その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌をまづぞ詠よまし

「元輔の娘」ゆえの重圧が、「返歌」によって示されたわけだ。定子との二人三脚ともいうべきパフォーマンス。詠歌をすべて拒むわけではなく、時と場合によることも、同時に告知されたことになる。結びとなるのは、次の一文。

つつむ事さぶらははずは、千の歌なりとこれよりなむ出いでまこうで来こまし、と啓けしつ。

「啓しつ」とあるので、相手は定子であって伊周ではない。つまりは主従の絆が確認される一方で、伊周の反応などは想像に任せる形で、本段は閉じられるのだ。事件時としては、これが伊周を描いた最後の場面となるが、この構図は、最初の事件時たる一七八段を思い起こさせる。「宮にはじめてまゐりたるころ」、緊張の極みにある〈私〉は、やはり「大納言殿」とともにコミュニケーションが取れなかった。伊周はあれこれと新人女房に言葉を掛けてくるが、すべて不釣合いな「身のほど」を痛感させるばかり。ここでも助け舟を出すのは定子で、章段の最後はやはり彼女との贈答歌をもって閉じられる。定子の心遣いを再認する逸話において、どちらも伊周は重要な役割を果たすも、いわばその引き立て役に終始している。

ただし、対話不全という顛末は似ていても、九六段と一七八段とは正反対のベクトルを持つ。一七八段の〈私〉が恥ずかしさゆえ答えなくとも答えられない者だったのに対し、九六段に描かれるのは、どこまでも伊周を拒み通す〈私〉だった。「登場人物」としての位相から見た場合、こうした九六段の〈私〉は、むしろ同年の「職」を舞台とした八四段と相通じていよう。八四段は〈雪山の賭け〉を語りつつ〈入内成功譚〉を内包するテキストだったが、〈私〉を始めとする作中人物はそこに関知することなく、気がつけば成されていたものとして「入内」は描かれていた。<sup>18</sup> 九六段も物語は〈定子との絆〉を再認しつつ閉じられ、例えば「召還後の伊周」の登場に対し、何ら特別な感慨は示されない。無位無官ながら職を訪れて歌会を主催する伊周の姿は、本来ならそれだけで注目に値しよう。しかも帰京後の伊周の動静を語る、これが唯一の場面である。八四段が密かに「三日入内」を伝えたように、ここでは政変以後の伊周（その健在ぶり）をさりげなく織り込むことに意義があったのだろう。ことさらな「事件」としては描かれないが、呼び込まれる〈背景〉が例によって重要な意味を引き受けさせてゆく。伊周の〈復権〉とは、そうした装いを必要とするような、デリケートな題材だったとも言よう。

さらに、本段の伊周像には、もうひとつ注目すべき側面ある。彼が本段以外では「大納言（殿）」と呼称されることは先に述べたが、同時にそこには必ず「をかし」「めでたし」等の賛美が添えられていた。九六段の「内大臣」は、ことさら賛辞も受けず、〈私〉には拒まれ、衣装描写もない異色な存在として、ここに屹立しているのだ。描かれたのは、前掲のような歌会主催者としての姿のみである。<sup>19</sup> そこで想起されてくるのが、伊周をいま一度「内大臣」（内のおとど）と呼ぶ跋文だろう。周知のように、そこでは彼が帝と中宮に料紙を献上したことが語られていた。やがては「史記」の書写につながり、「枕」草子を生み出してゆく、「内大臣」発の文化事業。九六段と跋文を併せたとき、作中に「内大臣」と呼ばれる人物は、文化の震源地とも言うべき役割を選んで引き受けていることになる。<sup>20</sup> 逆に言えば「帰京後の伊周」は、その一点においてのみ〈復権〉を許されているわけだ。

## 五、道長というフアクター

九六段以降、次に伊周が描かれるのは一〇一・一二五の両段である。配列上は〈復権〉後の登場となる両段には、それまでにない特徴が指摘できる。まずは長徳元年二月、淑景舎と中宮の対面を描く一〇一段では、

大納言殿は物々しう清きよげに、中将殿はいとらうらうじう、いづれもめでたきを見たてまつるに、殿(との)をばざるものにて、上(うへ)の御宿世(すくせ)こそいとめでたけれ。

と、殿(道隆)上(貴子)の「宿世」を称える文脈で、「物々しう清きよげに」と評されている。続く一二五段でも、黒戸から退出する関白道隆のために杵を取る姿が、

いと物々しく清きよげによそほしげに、下襲(したがさね)の裾長(しり)く引き、所せくてさぶらひたまふ。

とある。「物々しう清きよげに」は、伊周到のみ、しかもこの両段だけに用いられる語。〈復権〉後の伊周到、新たに用意された賛辞と言えよう。ただこのように賞される一方、一〇一段では、

山の井の大納言は、入り立(いりた)たぬ御せうとにてはいとよくおはするぞかし。にほひやかなるかたはこの大納言にもまさりたまへるものを、かく世の人はせちに言ひおとしきこゆるこそ、いとほしけれ。

と「山の井の大納言(異母兄の道頼)」を語る文脈で、伊周は「にほひやかなるかた」では道頼に劣ると評されていた。

方や一二五段は、枕草子で唯一、伊周が道長と同一場面に描かれる章段。戸の前に立つ道長を「お跪ひざまきにはなるまい」と見ていたところ、予想を裏切つて関白の前に跪ひざまいた。その瞬間を、書き手は次のように回想して見せる。

宮の大夫殿(だいふ)は戸の前に立たせたまへれば、へるさせたまふまじきなめり」と思ふほどに、すこし歩(あゆ)み出でさせたまへばふとゐさせたまへりしこそ。へなほいかばかりの昔の御行(おこな)ひのほどにか」と見たてまつりしこそ、いみじかりしか。

注目すべきは道長への呼称だろう。「権大納言」伊周に対し、彼は「宮の大夫殿」（後文でも「大夫殿」と呼ばれている。枕草子は伊周に「大納言殿」（十一例）「大納言」（六例）を併用しているので、本段のみ「殿」を省いたわけではない。だが、道長が他でも「左の大殿」（一三八段）「大殿」（二五九段）としか呼ばれないこと（定子の発話として「大夫」が一例）、ここが両者を描き合わせた唯一の場面であることを考えると、対比は際立ってこよう。九六段以降、再び伊周を描く両段では、道頼や道長との対比において「大納言」像の相対化がはかられているといえる。そうなると先の「物々しう清げ」さえ、どこかおざなりな贅辞に見えなくもない。いずれにせよ伊周は、枕草子における贅美の対象として、必ずしも絶対的な存在ではなくなっているのだ。

大夫殿のみさせたまへるをかへすがへす聞ゆれば、「例の思ひ人」と笑はせたまひし。まいて、この後の御ありさまを見たてまつらせたまはましかば、〈ことわり〉とおほしめされなまし。

同一二五段の結びである。定子崩御後、道長の栄華を踏まえた言説として注目されてきた。「思ひ人」が誰を指すかには道隆・道長両説があるが、いま権勢を誇る道長を、かつて道隆が跪かせた話なのだから、結果として「生前の道隆の威光を賞讃することになる」（『集成』）ことは確かである。しかし同時に「かへすがへす」申上げた内容が「大夫殿のみさせたまへる」とある点も看過できない。（私）は「大夫殿が、大夫殿が」と繰り返し語っていたことになるからだ。これが「思ひ人」道長説の根拠のひとつともいえるが、むしろ「大夫殿を」などと明記されない所に、絶妙な配慮を読み取るべきではないか。

ではそれはいかなる配慮なのか。重要なのは、書き手がここで「この後の御ありさま」、即ち定子崩御後の道長の「御」栄えの目撃者であることを、同時に明かしている点である。積善寺供養を描いた二六二段末（三卷本）の、

されど、そのをり（めでたし）と見たてまつりし御事どもも今の世の御事どもに見たてまつりくらぶるに……。

という「今の世」への言及とあわせて、「この草子」は道長の世に、その栄華を「今」として見据えながらまとめられていることになる。一二五段こそは道長自身が登場する唯一の章段であり、二六二段でも定子の発話に「登場」していた。この両段に「執筆の今」があらわだということは、「この後の御ありさま」や「今の世の御事」をテキストに呼び込むファクターとして、藤原道長の存在があったと見てよい。

一方、「この草子」執筆の下限を示唆しているのが、一〇三段末の、

「俊賢としかたの宰相など『なほ内侍そうに奏してなさむ』となむ定めたまひし」とばかりぞ、左兵衛督の中将におはせし、語りたまひし。

という一節だった。「中将」藤原実成が「左兵衛督」となるのは、寛弘六年三月（ひ）。現存の雑纂本は、具体的には〈寛弘年間の世相まで見据えた書き手〉というものを想定させることになる。だとすれば、かつての中宮女房として関心を抱かざるを得ないトピックが、そこには浮上してこよう。ひとつは、定子の遺した第一皇子（敦康のその後）。もうひとつは、まさに復権に向けての〈伊周の動向〉である。これらとともに「大殿」道長の意向に左右される、最も過敏なる政治問題でもあった。

## 六、寛弘年間の伊周

まず敦康親王は、定子崩御の翌年（長保三年）八月、中宮彰子の元へ移御、養子とされている（権記・同月三日）。十一月には着袴の儀が行われ（権記・同月十三日）、勅使として源経房が奉仕し、先述のように高階明順の昇殿が聴された。敦康の即位を望む一条帝と、いまだ彰子に皇子誕生を見ない道長の思惑が一致し、第一皇子をめぐる微妙な均衡が保たれていたと言える。こうした道長の敦康への後見は、そのまま伊周の処遇とも連動してゆく。配所から帰京して以来、表舞台に出ることのなかった伊周だったが、敦康着袴の後、同年閏十二月に女院御悩の大赦で正三位に復している（権記・同月十六日）。以後、伊周が実質的に復権を果たしてゆくのは、まさに寛弘年間のこと。寛弘二年二月二五日、座次が「大臣の下、大納言の上」と定められ、三月二六日には昇殿を聴された（御堂関白記・権記）。

周囲には不興もくすぶるなか、十一月十三日、朝議に参与する（権記）。

こうした伊周復権のいきさつを、栄花物語は次のように語っていた。

かかるほどに、むげに帥殿の御位もなき定にておはするを、「いといとほしきことなり」など、殿思して、いとほしがりて、准大臣の御位にて、御封など得させたまふ。（卷八）

大臣に準じて封千戸を賜ったのは後の寛弘五年正月だが、それも含め、すべては道長の温情の賜物だというのだろう。だが諸記録からは、融和にむけて動く伊周の姿が浮かび上がってくる。昇殿勅許の前年（寛弘元年）六月九日、まず頭痛に苦しむ道長を伊周が見舞う（御堂関白記、以下同書による）。閏九月二三日には道長が伊周に詩を届けさせているが、これは過日伊周から贈られた詩に、韻を和して答えたものらしい。伊周の詩は本朝麗藻に「秋日に入唐の寂照上人の旧房に到る」として伝わる<sup>(23)</sup>。さらに二六日、道長は自身と伊周の詩を一条帝の元に持参し、御製を賜っている。また同日、伊周からは再び答詩が届けられた。「余に近曾寂上人の旧房に到るの作有り、左丞相尊閣の忝<sup>かたじけな</sup>くも高和を賜へば、聊<sup>いさか</sup>か本韻に次し、敬みて以て答謝す」と題し、これも本朝麗藻が伝える。帝の御製には二九日に道長が奉和している。

伊周を震源地として、道長や一条帝の詩心が連動してゆく構図である。「御才日本にはあまらせたまへり」（大鏡）と称される「才」こそが、今こそ道長と一条帝にアピールされたのだ。特に答詩では「左丞相尊閣の忝くも高和を賜へば」「敬みて以て答謝す」と、道長への感謝を全面に打ち出し、尾聯を次のように結んでいた。

適交懷旧詩篇末（たまたま適交ふ懷旧の詩篇の末）

抱筆沈吟整葛巾（筆を抱き沈吟して葛巾を整ふ）

「適交懷旧」の詩句から、今浜通隆は道長からの詩に「懷旧」の念が詠じられていたものと解している<sup>(24)</sup>。その「懷旧」をこそ逃すまいと、

筆を手を沈吟する己の姿を「葛巾」を被った隠者になぞらえて、伊周はこの一篇に賭けた。徹底した平身低頭ぶりは、再起にかける思いの深さに比例しよう。長徳の変で傷ついた道長との関係は、どうしても修復が必要な最大関門なのだ。

こうした伊周の働きかけは、実際に翌年三月の昇殿勅許につながる。さらに翌日の「帝と一宮（敦康）の対面」「女一宮（脩子）の着裳」（三月二十七日）なる節目を経て、二十九日には道長郎にて作文会が開かれた。「巳時許」に現れた「帥」伊周の名を、道長は日記に記し留めている。そして「未時」、久々の晴舞台に伊周は渾身の作をもって臨む。詩題は「花落ちて春路に帰す」。

春婦不駐惜難禁（春婦らんとして駐らざれば惜しむこと禁じ難きに）

花落紛々雲路深（花落つること紛々として雲路深し）

委地正応隨景去（地に委むや正に応に景を随へて去るがごとくなるべく）

任風便是趣蹤尋（風に任するや便ち是れ蹤を趣みて尋ぬるがごとし）

枝空嶺微霞消色（枝は空しく嶺は微りて霞色を消し）

粧脆溪閑鳥入音（粧は脆く溪は閑かにして鳥音を入る）

年月推遷齡漸老（年月は推遷して齡は漸く老い）

余生只有憶恩心（余生に只だ有り恩を憶ふの心）

去り行く春への哀惜、生々流転の必然を、六句をもって叙景し尽くした後、やにわに述懐に転じている。過ぎ去りし年月が、この身にもたらしたのは「老い」だという。昇殿を許され、今後の復権に注目が集まるなか、己の在りようは道長の恩をかみしめる「余生」に過ぎないと詠じてみせた。時に伊周三二歳――。

この詩に「満座涙を拭い」主人（道長）も感嘆したと、小右記（同年四月一日・二日条）は源俊賢や藤原尚賢の証言を伝えている。この詩の何がそれほど人々の心に訴えたのか。単にかつての政敵に寛恕を願う姿が「あはれ」を誘ったからではあるまい。今浜通隆はここに、同じ三二歳で潘岳が詠じた「秋興賦」の巧みな援用を指摘する。それは「万物の流転」「老い」というテーマの継承のみならず、彼

自身のアピールになつていくというのだ。つまり、潘岳が「始めて二毛を見た」三二歳が「将来の官途への絶望」をかみしめる「人生の秋」だったとすれば、伊周の三二歳は今まさに政界復帰への一大転機。そこで彼が押し立てたのは「齡漸老」「余生」という自画像だった。道長と対立したのは若き日（人生の春）の未熟な自分。過失を「若さ」に負わせて、悔恨の情をも訴えたことになる。かつて傲慢にも映つたであろう伊周の姿が思い起こされ、人々は隔世の感に襲われたはずだ。道長主催の詩会、「春の尽きる」この日、伊周はまさに〈青春と決別〉を一篇の「詩」に結晶させた。その場でこの詩の投影する人生の有為転変に、不意に立ち会ってしまった者の感嘆は想像に難くない。伊周はその「才」をもって、したたかに己の居場所を作り出していったのだ。

## 七、敦康から一条帝へ

同寛弘二年、季節は冬へと移った十一月十三日。七歳になつていた敦康の読書始儀が飛香舎で行われ、侍読の大江匡衡が御注孝経を奉授した。その後には詩会があり、大江以言の序と道長以下の詩が本朝麗藻に残されている。道長はそこで「我王」は「君命を蒙りてより孫に殊ならず」と詠んだ。彰子の養子とした敦康は、自分の孫にほかならないというアピール<sup>(26)</sup>だろう。一方、当日の伊周は、次のように詠じている。

老臣在座私相語（老臣は座に在りて私に相語らふ）

我后少年学此文（我が后も少き年此の文を学びたまふことを）

ここでも「老臣」と称し、先の「余生」なる自画像を引き継いでいる。「孫に殊ならず」という道長の主張を前に「一步退く」姿勢にも見える。だが「老臣」を盾に彼が回顧してみせたのは、同じ七歳で読書始に臨んだ若き日の帝の姿だった。寛和二年十一月、侍読は高階成忠。高階の血脈たる「才」こそが敦康にも引き継がれているという密かな自負を、そこには読み取ることができよう。いずれにせよ一条帝が即位を願ひ、彰子もその意を汲んでいたと思しい敦康の前途に、伊周も大いに頼むところがあった。ならばいま優先すべきは道長と

の融和であることを、徒に対立した若き日々から学んでいたのだろう。

下玉利百合子は、この伊周詩の「言外の余情」に『枕草子』二九五段「明王の眠」の情景への回想と愛惜が湛えられていなかったなどと、何びとも断言できない」として、「伊周の意識構造」の次元から枕草子を呼び寄せていた。<sup>(28)</sup>だが実際は、伊周の詩句が読者におのずと二九五段の情景を想起させる、あるいは、後の敦康とも重ねたくなるように二九五段の一条帝は描かれている、ということだろう。二九五段、それこそは大納言最後の登場章段。「少年の日の帝」に漢詩文を進講する姿が、次のように描かれていた。

大納言殿まゐりたまひて 文の事など奏したまふに、例の夜いたくふけぬれば 御前なる人々 一人二人づつ失せて、御屏風 御几帳のうしろなどに みな隠れ臥しぬれば、ただ一人ねぶたきを念じてさぶらふに、「丑四つ」と奏すなり。「明けはべりぬなり」とひとりごつを、大納言殿「いまさらにな大殿籠りおはしませ」とて 寝べきものともおほいたらぬを、へうたて、何しにさ申しつらむ」と思へど、また人のあらばこそはまぎれも臥さめ。

冒頭から伊周を登場させる（主役）として描く）これが唯一の章段となる。同時に、上流貴紳との数々の交流を締め括る章段にもなっている。事件時は正暦五年あたりか。「夜いたく」更けるまで続く進講は、当時「例の」ことだったという。この夜も既に「丑四つ」に及び、同輩は「みな隠れ臥す」ありさま。その静けさゆえか、「明けはべりぬなり」なる眩きまで大納言の耳に届いてしまった。「いまさらにな大殿籠りおはしませ」と応じる伊周。女房への言葉としては丁重すぎるが「塩田評釈」が指摘したように、<sup>(29)</sup>あえて冗談めかした語法と見たい。通常の対話でなく、独り言に対する突っ込みだからだろう。状況がおのずと〈私〉を伊周と向き合わせてゆくのだ。

上の御前の柱に寄りかからせたまひて少しねぶらせたまふを、「かれ見たてまつらせたまへ、今は明けぬるにかう大殿籠るべきかは」と申させたまへば「げに」など宮の御前にも笑ひきこえさせたまふも知らせたまはぬほどに、長女が童の鶏をとらへ持て来て、「あしたに里へ持て行かむ」と言ひて隠しおきたりける、いかしがけむ、犬見つけて追ひければ廊の間木に逃げ入りておそろしう鳴きのしるに、皆人起きなどしぬなり。上もうちおどろかせたまひて、「いかでありつる鶏ぞ」などたづねさせたまふに、大納言殿の

「声、明王のねぶりをおどろかす」といふことを高ううち出だしたまへる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目もいと大きになりぬ。「いみじきをりの事かな」と、上も宮も興せさせたまふ。なほ、かかる事こそめでたけれ。

気が付けば、当の帝までが眠りに誘われてしまっている。「柱に寄りかからせたまひて少しねぶらせたまふ」微笑ましい姿を、伊周定子兄妹とともに見守る光榮。ひとときの静寂は、しかし突然「おそろしう鳴きののしる」鶏によって破られた。なぜいまここに鶏が、という事情の説明を経て、その先に用意されたのが「声、明王のねぶりをおどろかす」という大納言の朗詠だった。「皆人」や「上」の目を覚ましたのは鶏だが、「ただ人（私）」の眠気を吹き飛ばしたのは「めでたうをかしき」その朗詠だったという。

またの夜は、夜のおとどにまゐらせたまひぬ。夜中ばかりに廊に出でて人呼べば、「下るるか、いで送らむ」とのたまへば裳唐衣は屏風にうちかけて行くに、月のいみじう明かく御直衣のいと白う見ゆるに、指貫を長う踏みだきて袖をひかへて「倒るな」と言ひておはするままに、「遊子なほ残りの月に行く」と誦したまへる、またいみじうめでたし。「かやうの事めでたまふ」とては笑ひたまへど、いかでかなほをかしきものをば。

次の夜は中宮が「夜のおとどにまゐらせたまひぬ」ということで、局まで伊周が送ってくれた。裳・唐衣を脱いで身軽になった（私）の目に、月光に映える大納言の直衣がまぶしい。「倒るな」という気遣いのみならず、またも朗詠を堪能させてもらう。「遊子なほ残りの月に行く」。旅人のように、このまま月下を歩き続けたい気分だろう。最後を飾るのは「またいみじうめでたし」なほをかしきものは」といふ賛辞。日記回想段における「をかし+めでたし」の対象は、六段の定子に始まり、最後は右の伊周で締められる。詩歌吟唱を賞讃するのは、初登場（二一段）および再登場（七八段）以来のこと。伊周との対話がしつくりと成立するのも、二一段以来である。九六段の〈復権〉以下、伊周像にはそれなりの抑制や配慮も見られたが、この最後の登場場面では、再び九六段以前に戻るかのような、むしろそれ以上に心置かない賛美が尽くされている。

そして、本段のもうひとつの眼目は、第一皇子についてほぼ沈黙を守る枕草子が、一条帝のいたいな横顔を残した点にあるだろう（事

件時には十五歳くらいだが、印象はより幼い。「今の世」から見れば、寛弘の詩文隆盛の原風景を、「好文の帝」たる一条の原点を物語る光景にもなっている。寛弘の世に読まれてこそ、あるいは伊周自身の詩句（我后少年学此文）と重ねてこそ、本段は感慨を増すテキストと言えよう。

## 八、成信と経房

ここまで〈寛弘年間の書き手〉なるものを意識して、テキストを辿り直してきた。そこに見出されてくる「今の世」の気配は、実際の伊周自身の復権、彼が示した道長方への配慮とも、どこかで繋がるようにも見える。だがそもそも、道長が栄華を誇る「今の世」に、定子の記憶を結晶させた「この草子」を送り出すとなれば、おのずと求められる往来手形だったとは言えようか。

それはまた、書き手が主要人物に誰を選び、どう描いたか、という観点から指摘することもできる。主家以外で親しい交際が記された人物と言え、まずは藤原斉信と藤原行成があげられよう。「寛弘の四納言」に数えられる、ともに道長の信任も厚い重臣。彼らの登場章段が、各々「長徳の変」「彰子立后」という重大事件といかに関わっていたかは、前稿で指摘した<sup>(30)</sup>。そこでなされたテキスト上の決着は、斉信は「長徳の変」前後の決裂を暗示に留め、〈美しき記憶〉のよすがとして描き切ること。行成との交友は、〈彰子立后を受け入れた〉先の関係の深まりを示唆して終える、というものだった。こうした円満解決は、やがて大納言にまで昇り「今の世」の重鎮となる斉信、「敦康親王家別当」として忠勤を励む行成を、各々見据えながらの選択だったとも言えよう。

この斉信・行成の蔵人頭ペアに次いで、書き手が〈親しさ〉をアピールするのが、源成信・源経房という源中将ペアだった。斉信・行成が能吏として道長政権を支えたとすれば、彼らは養子、もしくは養子格という形で、道長に連なる人物である。最初に登場するのは成信で、長保二年の今内裏を舞台に冗談を交わす姿が描かれる（十段）。一方経房は〈正暦最後の光景〉たる七八段に「笙の名手」として初登場するも、〈私〉との会話は描かれない。初登場場面では親密度で成信がリードしているが、経房は八一段で〈私〉の里を知る数少ない男性のひとりとして再登場。さらに三度目の登場（二三一段）では〈私〉を「思ふ人」と呼び、本編最後の登場となる一三八段では、わざわざ里まで訪ねて〈私〉の帰参を促している。登場を重ねるにつれて、親密度を増してゆくのが特徴であり、最終的には跋文にて、

枕草子「最後の登場人物」の栄冠を手にする。跋文は「左中將」経房が「まだ伊勢の守と聞えし時」（長徳元年から二年）の逸話とされるが、それは一三八段の里訪問時とも重なっている。長徳の変直後に孤立する（私）を里まで訪ねた稀少な人物にして、「この草子」流布に関わる特権的な役割までも与えられたのが経房だった。

一方、早々に親交が描かれた成信は、経房に道を譲るように、以後テキストから姿を消してしまう。再登場は、本編で経房が退場した後、はるか先の二五八・二五九段だった。初登場から再登場まで、異例の長いブランクがある。行成・斉信のように近接して登場する（二二八～二三二段）ことのない、彼らは相互排除的に配されたペアと言えようか。まず二五八段では、「成信の中將こそ、人の声はいみじうよく聞き知りたまひしか」と、声を「聞き分く」力が評価されている。続く二五九段では「耳とき人」大藏卿正光の逸話中に言及されるも、あえて「大殿の新中將」と呼ばれていた。成信に「大殿」の後ろ盾のあることが、任「中將」（長徳四年十月）時点で強調されているのだ。成信章段では最も古い年時となり、またこの逸話が（伊周復権譚）（九六段）直後の、同じ「職」での出来事だったことも示されている。実際は無位無官だった「内大臣」に対し、前途洋々たる「大殿の新中將」の姿を印象付けていよう。

成信最後の登場は、二七六段。舞台は一条院の小廂。今内裏（十段）に初登場した成信に、最後に用意された舞台も同所だったわけだ。経房に（里での交友）のイメージが強いとすれば、成信は（一条院での交友）の印象を残す。その二七六段は冒頭から「成信の中將は」という形で、彼自身に焦点が当てられていた。先の二五八段の「成信の中將こそ」という書き出し同様、どちらも（主役）に据える体裁を持つ。だが結果として、二五八段は先述のように「声を聞き知る」という一点の評価に留まり、二七六段も「常にゐて物言ひ、人の上などわるきはわるしなどのたまひしに」と（四七段の行成のように）日頃の交友が総括されると思いきや、「兵部」という女房の登場から、雨の中を訪れる男への評価へ筆が流れ、成信は置き去りにされてしまう。<sup>31</sup> 枕草子における成信は、かくて交友の実相に展開を見ないまま退場してしまうのだ（一方、流布本清少納言集には日記回想段の一節を思わせる成信とのやり取りが見える）。

経房が存在感を増してゆくのとは対照的に、成信との逸話はまるで中絶されたように終わる。「斉信・行成」「成信・経房」と並べると、彼の（物語）だけが途中で放棄されているようにも見える。そこに何らかの要因を求めらるなら、長保三年二月四日、三井寺での「出家事件」（権記）が、やはり呼び込まれてこよう。道長の養子となり、子息に等しい貢献を期待されていた成信が、わずか二三歳で突然世を捨ててしまったのだ。道長にとっても想定外の痛手だった。倉田実によれば、そもそも正式な養子だった成信と「養子格」の経房とは「共

に道長に近習しながら、養子縁組の有無で差別があった」。しかしこの出家事件によって、実子同然に「道長の手足となる」役割は、成信から経房へ移行して行ったという<sup>(32)</sup>。ちなみに一条帝(敦康)との関わりから見ても、敦康誕生に際して御剣の使に選ばれたのは成信だったが、長保三年の着袴儀では(先述のように)経房が勅使となっている。

こうした役割交代をなざるように、ともに親しい交際を描きながら、最終的に書き手は経房を選ぶ。「この草子」を「今の世」に送り出す際、あえて(経房が流布させた草子)というキャプションを添えたのだ。むしろそれは「経房を通じて、道長方へ乗り替えようという(清少納言の)下心」を想定する『解環』説などは、全く次元を異にする。かつて(長徳二年)の清少納言に「書きかけの草稿」を「道長の目にとめ、自己の才能を認めさせて、中宮方から左大臣方へ移る手引きを経房にさせようとの魂胆があった」(『解環』五)のなら、結果として不首尾に終わった「下心」の痕跡を、ことさら跋文に記し留める理由が説明できない<sup>(33)</sup>。必要とされたのは、あくまで「この草子」公表時の経房なのだ。そこで「尽きせずおほかる紙」を提供した「内のおとど」と並ぶ大役が、「年ごろ大殿の御子のやうに」(栄花物語)見なされていた「左中将」に与えられた、ということである<sup>(34)</sup>。それは「この草子」の想定する読者が、例えば定子の遺児といった身内のみでなかったことを(あるいは、その先の読者層の広がりや想定されていたことを)物語っていよう。

## 結び

こうして枕草子の「今の世」に注目したとき、やはり最後に問題となるのは、前掲記事(一〇三段)の示す執筆の最下限が「寛弘六年三月」だったという点である。寛弘六年三月。それこそは、伊周がひとつひとつ積み上げてきた復権が、あえなく水泡に帰した直後の(決定的)年時なのだ。寛弘五年九月、彰子に皇子(敦成)誕生を見たことと、翌年一月の彰子・敦成に対する(高階光子らによる)呪詛の発覚による<sup>(35)</sup>。またも呪詛事件に巻き込まれる形で、伊周の政治生命は今度こそ絶たれる結果となった。

枕草子が(敦康のその後)と(伊周の復権)を見据えながらまとめられていたとしても、最後には決定的な挫折に襲われていたことになる。現存雑纂本が、この挫折以前にはほぼ形をなしていたものなのか、あるいは挫折を経た上で改めてまとめられたものなのか、厳密には確かめる術はない。九六段でなされた伊周の(復権)も、出来事時に立てば現実の先取りとなり、執筆時を挫折以前とすれば、現実世界の反映となる。あるいは挫折以後とすれば、かつては信じ得た復権の、せめてもの記念碑ということになるだろう。かくて枕草子にお

ける〈伊周の復権〉は、密かに果たされたとも、密かにしか果たされなかったとも言えるのだ。

いずれにせよ、二一段から二九五段（+跋文）までの長期に亘り、伊周は描き続けられた。登場間隔から見れば、定子に次ぐ長さとなる。<sup>(36)</sup>そしてその終着点に留意されたのが、日記回想段最後の「をかし+めでたし」の賛辞（二五九段）であり、「この草子」の誕生につながる重要な役割（跋文）だった。様々な配慮や取捨選択の果てに、おそらく書き手が辿り着いたのが、「大納言殿」としての、「内のおとど」としての、それぞれに〈かけがえのない〉片影だったのだろう。

註

- (1) 津島①「〈背景〉を迎え撃つ『枕草子』——「生昌段」翁丸段」から「國學院雑誌」二〇一一・八、②「あの日の未来」の作り方——『枕草子』にみる「清涼殿」再建」〔古代中世文学論考〕26、新典社、二〇一二・四、③「亀裂に巣食う〈花山院〉——『枕草子』小白川」と「菩提寺」の風景」〔古代中世文学論考〕27、新典社、二〇一二・十二、④「『枕草子』×権記——「頭弁」行成、〈彰子立后〉を背負う者」〔物語研究〕13、二〇一三・三、⑤「大雪」を描く『枕草子』——〈雪と中宮と私〉という肖像」〔日本文学〕二〇一三・五、⑥「記憶」を担う藤原斉信——『枕草子』斉信章段を読み解く」〔古代中世文学論考〕29、新典社、二〇一三・十二刊行予定）参照。なお、右の諸論考にて詳述してきたように、本稿でも現存「雑纂本枕草子」を最終的に統括する表現主体を「書き手」、テキストに表出された書き手自身のものと思われる動作（発話）の主体を〈私〉と規定している。
- (2) 枕草子の本文および章段区分は『新編枕草子』（おうふう、二〇一〇）による。
- (3) 稲賀敬二「鑑賞日本の古典『枕草子』」尚学図書、一九八〇。
- (4) 萩谷朴「新潮日本古典集成『枕草子』上、新潮社、一九七七。
- (5) 下玉利百合子「試論枕草子の周辺をめぐる——世尊寺の花見（中）」〔平安文学研究〕一九八一・六。後に『枕草子周辺論』（笠間書院、一九八六）所収。
- (6) 萩谷朴「枕草子解環」二、同朋舎、一九八二。
- (7) 稲賀敬二（注3に同じ）。
- (8) 『枕草子周辺論』論考十二「補説」。ここでは「解環」を踏まえた上で再度「九月四日」説が提唱されている。
- (9) 津島「記憶」を担う藤原斉信」〔注1⑥〕参照。

- (10) 内大臣時代（特に道隆薨去前後）の伊周は、若さと焦りが災いしてか、一条帝との様々な軋轢を記録に留めている（伊周の生涯については、増田繁夫「藤原伊周伝」伊井春樹ほか編『源氏物語と古代世界』一九九七、新典社、倉本一宏「藤原伊周の栄光と没落」『摂関政治と王朝貴族』二〇〇〇、吉川弘文館などで概説されている）。長徳の変当時の呼称でもあった「内大臣」を、書き手は該当する出来事時には用いず、「帰京後の伊周」のために保存しておいたのだ。
- (11) 栄花物語の本文は小学館『新編日本古典全集』による。
- (12) 金子元臣『枕草子評釈』明治書院、一九二二。
- (13) 田中重太郎『枕冊子全注釈』二、角川書店、一九七五。
- (14) それ以前は「高階真人」。真人も由緒ある姓だが、すでに真人姓の議政官への登用はなくなっていたという（角川書店『平安時代史事典』「真人」参照）。
- (15) 一方で枕草子は、栄花物語が「才かぎりなきが、心ざまいとなべてならずむくつけく、かしこき人」(卷三)などと、ことさら注目した「高二位」成忠の影を完璧に排除している。また「少々の男にはまさりて」(大鏡)「真名などいよく書きければ」(栄花物語)とされる「高内侍」貴子は二章段に登場するも、「才に関する言及などはない(貴子の描き方をまとめた論考に、岡田潔「枕草子」に描かれた高階貴子」「女子聖学院短期大学紀要」一九九三がある)。「呪詛事件」などとも関わるゆえ、高階一族への言及には相応の配慮が求められたのだろう。積善寺供養の段でも「明順の朝臣の心地、空をあふぎ胸をそらいたり」(三卷本)と、明順だけが焦点化されていた。
- (16) 東望歩「藤原公信考」(『古代中世文学論考』25、新典社、二〇一一)。
- (17) 渡邊裕美子「和歌史の中の『枕草子』」(谷知子・田淵旬美子編『平安文学をいかに読み直すか』笠間書院、二〇二二)。
- (18) 津島「大雪」を描く『枕草子』(注1⑤)参照。
- (19) 『新編枕草子』の注(中島和歌子)にも指摘がある。
- (20) 料紙献上の事件時は不明。実際は左遷前だったかもしれないが「大納言」「内大臣」の呼び分け、描き分けが、テキスト上はその役割を規定している。
- (21) 先例としては『うつほ物語』国議上に、藤壺づきの孫王の君を「物々しう清げなる人」と評した例が見出せる程度。
- (22) 「中将」が誰を指すかには諸説ある(注1⑥参照)。
- (23) 本朝麗藻本文は今浜通隆「本朝麗藻全注釈」二(新典社、一九九八)による。訓読も主に同書に従った。
- (24) 注23に同じ。

- (25) 注23に同じ。
- (26) 敦康をめぐる人々の意向については、倉田実「敦康親王と彰子——『後漢書』の馬皇后の故事から」（『王朝撰関期の養女たち』翰林書房、二〇〇四）に詳述されている。
- (27) 下玉利百合子「世尊寺の花見（下）」（注5前掲書）。
- (28) 注27に同じ。
- (29) 塩田良平「枕草子評釈」学生社、一九五五。
- (30) 津島「記憶」を担う藤原斉信「枕草子×権記」（注1⑥④）参照。
- (31) 二七六段の特異性については、三田村雅子「意味」の解体——「成信の中將は」段の位置（『枕草子 表現の論理』有精堂、一九九五）に指摘がある。
- (32) 倉田実「源経房と藤原道長——『栄花物語』の記述をめぐる」（『山中裕・久下裕利編『栄花物語の新研究』新典社、二〇〇七）。
- (33) 萩谷説に対しては、関口力「清少納言と源経房」（『むらさき』二〇一・一二）などにも反論がある。
- (34) 寛弘二年に参議となつている経房は、「今の世」なら「宰相中將」と呼ぶべきだろうが、これは枕草子では（特別な呼称として）斉信に占有されていた（注1⑥）。よつて作中では「経房の中將」「左中將」で通されたのだろう。なお三卷本では一三八段のみ「右中將」とある。ここだけは出来事時を右中將時代（長徳二年七月〜同四年十月）とする年時表出を優先させたか。あるいは「左」「右」文字転化の可能性もあるか（能因本は「左中將」）。
- (35) 栄花物語（巻八）は呪詛事件の容疑者を明順として、源氏物語の柏木を思わせる臨終まで描くが、古記録からは明順の関与は確認されない。
- (36) 三段の「三月三日」の記事を伊周登場の予告編と見れば、さらに間隔は広がる。なお伊周自身にも「三月三日」宴席での七言律詩があり、清少納言がその日の伊周の晴れ姿を踏まえて「三月三日」の情趣を描いたのではないかという、今浜通隆の推論もある（『本朝麗藻全注釈一』）。